

『劣等感の出来方と 家庭での接し方』

家庭での所属感の作り方

について

人は常に心の奥底に多かれ少なかれ劣等感を持っているようです。劣等感が強くなるとそれを解消し優越感を得ようと努力することで一時は解消されても心は更に劣等感を深めてしまいます。

屈辱感を乗り越えようとし『私はすごいんだ』と周囲に言っても何の解決にもならず劣等感はむしろ積もっていくばかりです。

深刻な劣等感のある人はそれを解消することが全てにおいて優先されます。依存症に似たようなものでそれを解消することを優先しないとられないようになっていきます。

人と心が触れ合うことで劣等感は解消されていくのですが、それを認識していないと劣等感を解消するために逆に相手に優越しようとしてしまいます。

劣等感を持つと本来の夢に向かっての努力ではなく、良く見られるための表面を整える為の努力をするようになります。そうすると本当の意味で人との心のふれあいが出来なくなります。

我々大人は人とのふれあいにより人生が変化していくことを認識していないといけません。

子供が劣等感が強くなる環境というのは『所属感』が欠如した状況から生まれやすいと言われております。

自分は誰とも心が触れ合えない、どこの集団にも心理的に属してないということが所属感の欠如という状態になります。

例えば家で勉強の成績がいい時は褒められるが、成績が悪いと厳しく怒られ家に居辛くなる。スポーツで優勝したり良い成績を上げると親が喜んでくれるが、そうでない時は厳しく家で練習を強いられたり、怒られたり、細かく指摘されたりする家庭に居ると子供は成績を良くすることが出来れば家にいるための存在感が得れるという意識を芽生えさせていきます。

これでは家族との心のつながりでなく成績という形式的なつながりになってしまい家族の中で所属感を失っています。

そして、そういう子供は居場所を作るために時に（何をしてでも）成績をとることをし出します。スポーツで言えばアンフェアな行為をしてでも順位を上げようとし出します。

そうでないと家に居られる価値がなくなるから一生懸命手段を選ばず成績を上げようとしします。

これは自分が好きで一生懸命やるのではなく親の期待に応えるため、家に居場所を作るために一生懸命成績を取りに行くように自然となっていくってしまいます。

このように育った子供が劣等感を持ち社会に出ても本来の幸せの為の努力ではなく劣等感を解消するために優越感を得ようと違った方向の努力をするようになり本来の幸せをつかむことが非常に困難な状況になるようです。

そして劣等感の解消目的で自分を自慢をしたり他人の間違えを非難したりしなければ他人から相手にされないと思うようになります。それが続いていくと大変なことになり周りから人が遠ざかっていくことになってしまいます。

このように子供のころから親の望み通り動かなければ自分は親から拒絶されると思いながら育つとその恐怖に従って動くように日々心が動きそのように育っていってしまいます。

そこにその子の本来の夢とか希望はありません。

周囲に認められることのみが唯一の希望となっていきます。

このような人生ではとても苦しい生き方を続けなくては行けなくなります。

お子様に将来素晴らしい人生を歩んでいただく為に、家庭では子供の成績に一喜一憂せずそこに至るまでの努力を称えてあげられたり応援してあげられる親の姿勢があり、親がやらせたいものと子供が好きなものは混同せず（子供には子供の人生が存在します）、好きなことに熱中させられる家庭であり、家族は『自分を認めてくれている、応援してくれている』と思える存在であるという意識をつけていけるのが望ましいと思います。

俗にいう成績至上主義、勝利至上主義、親の夢の為の子供の頑張りでは劣等感の強い人間となっていき将来自分の自慢や劣等感の解消のために他人の非難をする人間に育っていったらということをご認識して頂ければと思います。

好きなことに熱中出来て努力出来て成功体験を積み、自信をつけ、自らの夢に向かい努力が出来て、その先に苦しいことでも自分から乗り越えられていくことが出来るようになる為に家族は安心感のある存在であり応援してくれる存在で居たいものです。そして子供は大人の背中をみて育ちます。

大人も努力し正々堂々と頑張っている背中を子供に見せてあげるようにしたいものです。



Thank You For Your Attention!